度に発達した幾何図形の研究に於て、以上の解決を以て、わが仙台藩の最高水準と看做してよい。山形の和算家橋本源八郎守善（明治２７年５７才歿）は「仙台之天文家武田先生星学寛政暦理之術皆伝受後諸国周遊」と称しているから、武田保勝は天文家としても有名であったことが知られる。』

「藩臣須知」（別本）（「宮城県史」３２の内）に『天文者　遠田運記　武田司馬』

「仙台の高名見立くらべ」（「わしが国さ」第５６号の内）〔嘉永、安政頃のもの、南町薬舗小西家から出た雑記帳〕に『天文は武田』とある。

注(5)　グリニッチGreenwich 。イギリスのロンドンの東南、テムズ川右岸に位する天文台所在地。ここを通過する経線を本初子午線という。またグリニッチ子午線上における平均太陽時（真夜中を零時とする）をもって世界一律に用いる時法とする。これをグリニッチ時また世界時という。１９３５年制定。

資料　仙台市政一斑昭和７年度（仙台市）

仙台市勢要覧昭和２５－２７年版（仙台市）

五万分一地形図仙台

112　「一重伸」、「二重伸」、「扇返し」はどう読むのか

問　「仙台あのころこのころ八十八年」（仙台八十八選選定委員会編）のP.４５に、「水府流泳法事始」（大石栄一）と題して、次のことが書かれています。

『岩本忠次郎先生は、明治３８年８月から４１年４月まで、宮城県立仙台第一中学校の英語の先生である。先生はまた水泳の水府流(1)の名手でもあった。

室町時代から武技の一つとして発達してきた各流派の水泳術も、明治の中期からは一般にも開放され伝授されるようになった。仙台藩には流派がなかったようである。先生によって水戸藩の水府流が伝授され、仙台の旧来の泳法に新しい息吹きが吹き込まれたのである(2)。水府流には正統派と太田派との二派があり、岩本先生は太田派の二代目宗家を継承した。在職中、一中水泳部を指導したのが先生である。

唐戸淵(3)が一中の水練場であった。水府流の一重伸、二重伸の伸泳ぎと扇返しの妙技を披露されたときは、ただただ驚嘆するのみであった。その後先生から指導を受けた数人が、仙台水泳会を発足させた。源兵衛淵(4)を水練場に大正初年から７年まで、多数の青少年を仙台水泳会が指導した。』

この中に出てくる「一重伸」、「二重伸」、「扇返し」の泳法用語は、何と読むのでしょうか。

答　「一重伸」は「ひとえのし」、「二重伸」は「ふたえのし」、「扇返し」は「あおりかえし」と読ませます。

注(1)　水戸の徳川斉昭が天保１３年〔１８４２〕当時水戸那珂川に於て行われていた上市〔うわいち〕に於ける島村流と、下市〔しもいち〕に於ける小松流との合併を命じ水府流水術と称するに至った。その後明治に至るまで、それぞれの教場で水府流の指導が行われていた。小松流は天文年間に小松軍蔵によって、島村流は元禄年間に島村正広によってそれぞれ水戸に創始されていたものである。明治になると水府流は東京へ進出し、天才的な太田捨蔵が更に幾多の工夫と改善を加えて、水府流太田派を編み出してその普及に努め、学校水泳部に教授を始めたので、非常に盛大となった。泳法は極めて力強く実用的で、扇足〔あおりあし〕横体泳法が基本となって、河流に抗すべき急速泳法に見るべきものが多い。一重伸・二重伸その他の横体泳法、中にも特徴ある片抜手一重伸を始めとする横体抜手泳法、大抜手・小抜手に加えるに早抜手〔跛〔ちんば〕抜手〕等幾多の優秀な泳法を含んでいる。太田水泳場は、明治３１年頃には二三回も在留外人と国際競泳を行った。大正年間に入って、水泳が急速にスポーツ化され、競技化されるに及んで、この流の諸泳法が一般に用いられ、クロール泳法に代るまで、わが国の水泳競技の先駆をなしていた。

日本水泳のオリンピック初参加は、大正９年〔１９２０〕第７回アントワープ大会であった。水府流斎藤兼吉が「片抜手」泳法で泳いだ。当時ヨーロッパはクロールの全盛期だったので、肩で水を切る珍妙な横泳ぎに、観衆は大いに驚いたという。４００メートルを外人と２人だけで泳いだ斎藤は準決勝に進んだが、大差をつけられ３００メートルで棄権した。この惨敗の反省から日本の水泳界は古式泳法を見限り、クロールを導入することになったのである。

注(2)　「宮城県史」１８に次のように記されている。『水練　仙台藩には師範とか家業人とかを命ぜられていたものはないようである。これは武術としては採り上げていなかったためと思われるが、であるからといって疎かにしていたわけではなく、武士の嗜みとして修得していたことは勿論考えられる。特に仙台の川内、仲ノ町、霊屋丁の三丁御小人組には、必修の職の一つとして水練が課せられていた。御小人組は広瀬川で習練を積み、毎年夏賢淵で藩主の検閲を受けるのが例であった。〔御川衆の呼び名があるのはこのためである。〕水泳は藩政時代水練と呼ばれ、水府流と向井流が行われたが、将軍家が採用した関係からか、特に向井流が盛んであったようだ。しかし明治時代に入っては、泳法の奥儀を伝えた熟練の士はいなかったようだ。』

注(3)　広瀬川の米ケ袋、もと県立工業高校敷地よりやや下流、向山長徳寺下附近の淵。明治３２年から４０年まで、旧制一中校舎が南六軒丁にあったから、此処は同校にとって至近の水泳場であった。

注(4)　霊屋橋の直ぐ上流の淵

資料　国民百科大辞典第７巻（富山房）

113　「荒城の月」はどの詩集の中にあるのか

問　「荒城の月」は、晩翠の詩集のどれに載っているのでしょうか。どうしても見つかりません。

答　「荒城の月」が載っている晩翠自著の詩集には、「晩翠詩抄」（岩波文庫本、昭和５）と「自選詩抄」（昭和１７）とがあります。

「晩翠放談」（土井晩翠、昭和２３）に『東京音楽学校が中等唱歌集の編纂を企て、当時の文士にそれぞれ出題して先づ作詞を求めた。私にあてられたのは[1]他の２編と共に「荒城の月」であった。この題を与へられて先づ第一に思ひ出したのは会津若松の鶴ケ城……私の故郷の仙台の青葉城……この名城も作詞の材料を供したことはいふ迄もない。……この作詞を音楽学校が採用して作曲を滝君[2]に依頼したものと見える。』とあるように、明治３２年、晩翠２９才の作品であります。やがて明治３４年３月３０日「中学唱歌」が発行されますが、収録作品の作詞者名・作曲者名は記さず、「東京音楽学校蔵版」と明示して[3]著作権を音楽学校一本に帰属させています。一世を挙げて愛唱され、永く唱い継がれる不朽の名作「荒城の月」の歌詞を、その後出版する自著の中に採り入れることをしなかったのは、そのためであります。その後時は経過し、昭和５年６月岩波文庫本「晩翠詩抄」を世に送ります。その中の「天地有情」（第一詩集、明治３２）の３０年前に本来ならば入れるべかりし本文系列の中に「荒城の月」を割り込ませているのです。これに次ぐ「自選詩抄」（昭和１７）にも、勿論「荒城の月」をとり入れてあります。

注(1)　明治１２年、音楽教育の調査研究と教員養成のために文部省内に「音楽取調掛」が設置されたのに始まり、翌年から「伝習生」を入れて教育を開始した。明治１８年には「音楽取調所」と改称され、２０年には東京音楽学校となり、その発展は順調であるかに見えたが、明治２４年になって突然廃校の危機に立たされた。帝国議会での予算審議の際に、財政難を理由とする廃止論議が起ったのである。関係者の努力で漸く廃校は免れたものの、２６年には高等師範学校の附属に移されてしまい、再び独立校となるには明治３２年をまたねばならなかった。中学唱歌の編纂が始まったのは、独立した明治３２年と考えるのが至当である。わが国音楽教育の中心として幾多の傑出した音楽家を生み、昭和２４年東京美術学校と合体して東京芸術大学に昇格した、音楽学部はその後身である。

注(2)　滝廉太郎。明治時代の天才的作曲家・ピアノ奏者。明治１２年８月２４日東京市芝区南佐